

冒頭の記事、連載第1回目に登場した和歌山市冬野のまゆーら文庫は、今も運営を続ける。開設から30年以上子どもたちを見守る藤浪和子さん(74)は「本をお寺の廊下に置いたら、地域の子どもたちが自由に読み出したのが始まりでした」、芝直子さん(62)は「当時は多い日で1日30人は来ていたと思います。今、この文庫へ来る子は8人ほどで、皆ここへ通った子の“2世”ですね」。

本棚には、図書館から団体貸し出しとして年間200～500冊を借りたり、助成を受けて購入したりして集めた児童書や絵本、伝記を並べた。

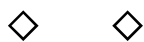
連載に登場した紀の川市の「桃の木文庫」を引き継ぎ、現在きこれん代表を務める宮本知華さん(49)は「私自身、東高松にあったふるむ文庫に通っていました。高松小の子がほとんどで、プレハブみたいな部屋に本棚と長い机があり、自由に読んでいましたよ」とにっこり。

本を読むだけでなく、カレーなどの調理体験や季節の行事など、イベントも文庫ならではの楽しみだった。当時まゆーら文庫に通った和歌山市の上田大愚(たいぐう)さん(45)は「自分たちで新聞を作ったり、境内で遊んだり。学校が終わって家に帰ってから行くと、自転車はずらっと並んでいる。皆、文庫に行く日を楽しみにしていました」。



図書館が増えても

各地に図書館ができ、学校図書も充実、子どもたちの遊びやライフスタイルは変化した。主宰者の高齢化や子どもの減少を受け、最盛期には紀北地方だけで約20軒あった文庫の多くが解散したり、読み語りグループとなって活動する中、今も四軒が開いている。芝さんは「本を借りて読むだけなら図書室でもいいのに、なぜ文庫が今も続いているか。それはやはり、本を通じた交流、子どもたちの居場所になっているからでしょうね」。温かいまなざしは今も変わらない。



「ニュース和歌山が伝えた半世紀」は毎週土曜号掲載です。

▶▶▶ 1980年掲載の主なニュース ◀◀◀	
10 / 5号	和歌山の地価高騰平均地価全国9位に
7 / 9号	住金工場用地の埋め立て工事開始
6 / 8号	は桶見小の約2千人。2位木本小、3位雑賀小
5 / 21号	増える児童数 軒並みマンモス化…児童数1位
4 / 6号	本町公園に地下駐車場オープン
3 / 23号	和歌山市民図書館あす起工
3 / 19号	電波の谷間解消 木ノ本に民放中継局開局
2 / 17号	朝市を開催し、この後、他地区にも広がった
	主婦が結束し業者と直接交渉。河西地区で安価の
	りながら、京都や奈良より高いのはおかしい」と
	大成功 主婦の朝市…「和歌山は鮮魚が豊富であ

※ニュース和歌山2014年4月26日号掲載

